

## 日本音楽の体験

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/7213">http://hdl.handle.net/10297/7213</a>

# 日本音楽の体験

音楽教育講座 小西潤子

## 1. グランシップにおける鑑賞・入門教室

学校教育現場で求められる日本音楽の指導への対応として、今年度もさまざまなかたちで学生に日本音楽を学ぶ機会を提供してきた。本稿は、それらを紹介するものである。

音楽や芸能の鑑賞は、本来は作品として目の前に提示される演目を時空間の制約を受けながら行うものである。したがって、作品が完成するまでプロセスはヴェールに閉ざされているし、その再現である舞台の進行と時空間を共にしなければならない。この条件が、しばしば初心者にとっての敷居の高さとなる。何の予備知識もない鑑賞者は、もしかすれば作品の完成に至るプロセスを知るとより親しみを感じるかも知れない。また、見逃したシーンをプレイバックできたり一旦停止できたりすれば、疑問が解けるかも知れない。日本伝統芸能の担い手は、これまでの技を見せる側にとどまるのみならず積極的に観客に働きかけることで、鑑賞者層の拡大を狙っている。

担い手と鑑賞者の媒介役として、グランシップという公共ホールの運営にあたる（財）静岡県文化財団は、「鑑賞教室」と題するイベントを定期的開催している。教育学部は、学芸員実習のうち「文化芸術事業実習」の実習先として、（財）静岡県文化財団との連携を重ねてきた。今年度からは、学生には「はじめての劇場体験」と称して、グランシップにおける自主事業の多くを破格で提供することもあり、4月のガイダンス時から積極的に音楽や芸能イベントの鑑賞をするように学生に呼びかけてきた。また、実習生として関連イベントの運営補助作業に従事した学生もいる。本稿では、このうち2011年6月2日「歌舞伎鑑賞教室」と8月28日「能楽入門公演」をとりあげ、近隣の公共施設における鑑賞・入門型文化事業の参加体験についてまとめる。

「歌舞伎鑑賞教室」は、グランシップ伝統芸能シリーズとして、国立劇場で6月4日から26日にほぼ毎日2回公演する第79回歌舞伎鑑賞教室を前倒しするかたちで、グランシップ中ホール大地で開催されたものである。独立行政法人日本芸術文化振興会、財団法人静岡県文化財団、静岡県が主催し、文化庁、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会が後援し、11時からと2時30分からの2回の公演が行われた。「解説 歌舞伎のみかた」と「義経千本桜」のハイライト「河連法眼館の場」から構成され、前半は平成生まれの中村壺太郎、坂東巳之助、中村隼人各氏がそれぞれ解説、佐藤忠信役、静御前役を担った。若手によって、舞台の構成や女形の所作、作品のみどころなど、歌舞伎を初めて見る者にもわかりやすく説明がなされた後、後半で彼らは役柄を変えて登場した。学生にとっては、目の前でわかりやすい解説を交えて歌舞伎が展開されたことから刺激を受けたのはもちろんのこと、同年代以下の若手役者が堂々と舞台を演じていることであつた。舞台に立つという点で、音楽と古典芸能とは共通するからである。

「能楽鑑賞教室」は財団法人静岡県文化財団が主催しており、今回で10回目となる。2011

年は、観世流シテ方・山科彌右衛門（二五世宗家観世左近次男）、観世芳伸（二五世宗家観世左近三男）、観世流能楽師各氏および静岡県能楽鑑賞会より講師を招いて、6月7日より10回にわたって中学生以下は17:00~18:00、一般は19:00~20:00に能の指導を受けた。

静岡大学教育学部では、文化芸術事業実習の1つとして例年学生が練習から本番までの補助を行っている。昨年度に引き続き、実習生は5月24日附属教育実践総合センター多目的ホールにて、山科講師による事前研修を受講した。また、初めての試みとして、8月1日実習生のサポートによる「能楽師にインタビューしてみよう！」も行われた。これは、参加した子どもたちの夏休みの自由研究課題にもなることを目論んだものである。これに際して、実習生はインタビュー内容を考えてレジュメを作成し、司会をするなどの役割を果たした。

こうして練習の全日程を終えた後、9月12日の「能楽入門公演」の第一部で、参加者たちはその成果発表として謡と仕舞を行った。第二部「観世流能楽師による能楽入門講演」の『『能』のお話』「解説」では、演能中に役者の動きを一時停止して解説を入れるという、異例の演出が行われた。演じる側にはとても難しいことを要求することになるが、鑑賞する側にはとても親切でわかりやすいものであった。公演後、能楽師から子どもたちへのプレゼントとして観世流特製クッキーがふるまわれたが、これを配布していた学生によると参加していた子どもは30人いないくらいで少なかったということであった。1回で結果を出すことは難しいだろうが、財団法人静岡県文化財団ではこれまで小学校を中心に能の出前授業を積み重ねているので、何年か経ってからでもその成果が出るよう期待したい。

## 2. 尺八特別講義

6月13日、静岡大学工学部出身で邦楽部OBでもある国際的尺八演奏家として活躍する田嶋直士氏を招聘し、共通教育「芸術論」および音楽文化専攻1年「新入生セミナー」受講生を対象にした実演を交えた講演を実施した。前者については、尺八音楽の基本を周知すること、後者については海外で活躍するプロの尺八演奏家のキャリアについても触れていただくことを目的とした。田嶋氏には2010年度にも来学していただき、手作り尺八づくりを含む集中講義をしていただいた経緯がある。

今回の講演内容では、まず国内と海外での尺八音楽受容の比較について述べられた。田嶋氏は、公演直前の2011年5月24日から6月2日にかけてフランクフルト、オルデンブルク、リュベック、ミュンヘン、ニュールンベルク、ベルン、チューリッヒ、ジュネーブで演奏活動を行っていた。講演では、まずこれを通して得られた聴衆の反応や文化を超えた尺八のメッセージ性について言及された。演奏プログラムは、《下り葉》《打波の曲》《手向》《山越》《心月調》《産安》の後、休憩をはさんで《鶴の巣籠》《虚空》と古典本曲のオンパレードであった。しかも、曲の合間に拍手を入れず、前半50分、後半20分を台上に正座するかたちで演奏し通した。現代日本人にとって耳馴染みのない古典本曲立て続けの

演奏に対して、西洋の聴衆は緊張感をもって身じろぎもせず集中して聴きいていた。そして、「心が安らかになる」「様々な情景が感じられる」「初めての体験」「神秘的」などの感想が寄せられ、持ち込んだ CD が売り切れるほどであったという。

田嶋氏は、海外公演によって尺八における「宇宙観」「哲学」「宗教観」が発する強いエネルギー、集中度の高さと持続性、表現の深さと広がりをもたらすインパクトを再認識し、日本の若者に聴いてもらう機会を増やしたいと考えた。古典本曲にこれだけ人々が聴き入ることができることから、尺八は決して古くて退屈なものではなく、世界に誇る日本の芸術であることを学生に理解してもらいたいとの思いから講演に臨んだと述べられた。学生からは「緊張感で脈が速くなるのを感じた」「音楽に向かう姿勢が素敵だと思った」「音色にも息を吸う音にや吹く音にもエネルギーがあった」など、身近で聴いてわかる魅力が伝わった。CD や MP3 ファイルを通じて音楽を聴く学生は多い。しかし、それらは情報化された音楽である。情報化されるに至るまでに、音楽の大切な部分が切り取られざるを得ない。音楽情報は、データ化するには容量が大きすぎるからである。学生たちは、実演を聴くことの重要性という一見当たり前なことの大切さを少しでも感じ取ったのではないかと思われる。

### 3. 箏の指導法

2012年2月2日の音楽科教科内容指導論Ⅰ、2月6日の音楽科教科内容指導論Ⅱでは、宮城流大師範の吉田理世、吉田道美各氏（写真1）を講師として招聘し、学校教育における箏の指導についての実践を交えた講演を依頼した。2年生、3年生では、すでに学校で箏に触れてきた学生も多い。しかし、授業をする立場と単に触れるだけとは全く異なる。というのも、まず箏の扱い方を知らなければならぬからである。当たり前のことではあるが、実際に学校現場では誤った箏の扱い方をする教師が多いことを吉田講師は指摘する。

具体的には、まず箏をどのように持って運ぶかを知らねばならない。楽器には上下があるので、ケースに入れたまま運んで立てかける場合、どちらを上にするかを意識せねばならない。ケースを開いて床に置いて椅子に座って演奏する場合には、立箏台が必要になる。しかし、座奏の方がよりスペースを確保しやすい。では、楽器の左右の向きはどうか。教室に設置された箏を見ると全部逆向きに置かれていた、ということが起こっているらしい。チューニングはどうするのか。調弦をしてすぐよりも、1時間ほど置いた方が音がなじむという。さて、子どもたちの爪をどうやって用意するのか…このように、演奏よりも準備の方が時間を要するし、きちんとした状態で演奏しないと子どもたちの関心を引くことはできない。基本をおさえておかないと上達しないから面白くないし、子どもたちはよい楽器がわかるので、間に合わせの楽器では結局無駄になってしまう等など。

吉田講師のてきぱきとした説明と実践に対して、学生たちからは、「奏法や爪のはめ方など、演奏に必要なことしか習ってこなかったの、教える立場になったときどう対応したらいいのか」ということは本当に何も知らなかった」という率直な感想が出された。また、「子

どもたちには本物の楽器の鳴らし方、音色を感じてほしい」「子どもたちにいかにやりたい気持ちにさせるのか、心をつかむというのを授業では考えなくてはならない」「あいまいな説明ではなく、右手の構えの形はどうするのかなど具体的な説明が重要であると感じた」など、音楽的な魅力を伝えることの重要性への理解が深まった。

実は、吉田氏の準備はこの授業時間内にとどまるものではなかった。1コマ限りの講義では不足する情報を補うためにたくさんの資料を準備したり、来年度から採用される教科書の情報を収集したりと、公演を依頼した直後から着々と用意をしてこられたのである。こうした取り組み方に、日本音楽をこれまで伝えてきた文化と精神性を感じずにはいられない思いであった。



写真1 手前から吉田理世、吉田道美講師（2009年9月撮影）